

上川アイヌと馬

旭川市博物館

明治24(1891)年、永山村に400戸の屯田兵が入植し、上川の本格的な開発がはじまりました。しかし、それはまだ広大な盆地のごく一部にすぎず、あたりには天を突く密林や草原がどこまでも広がっていました。



ドサンコ(剥製)

翌年の5月28日から3日間の予定で、忠別川沿岸の測量調査をおこなっていた永山屯田の南部軍曹と奥野次郎右衛門氏ら3名は、無数の蹄の跡がのこる踏み分け道を発見しました。たどってゆくと「当時としては割合に大きい四尺四寸くらいの青毛の馬」が突然あらわれ、驚いた3人はこれに発砲、付近のカヤ原に散っていた馬の群れが一斉に逃げだしました。

事件の3ヶ月後、この話を聞きつけた空知太(現滝川市)の旅館「大阪屋」主人は、日高から来ていた数人の馬喰(馬の売り買いをする商人)をともなって上川に入り、忠別川沿岸で親馬22頭、仔馬5頭、計27頭の生捕りに成功します。

奥野氏は、日高から富良野を経て入り込んだ馬が、早くから上川で自然に増えたものではないかと推測しています。それが事実かどうか明らかではありませんが、上川で馬が野生化していたことは確かなようです。

上川アイヌが馬を飼っていたとの記録はありませんし、そもそも本来北海道に馬は生息していませんでした。しかし、中世には道南に進出した和人が馬を飼っており、近世には道央部で馬が飼育されていたことも考古学的に確認されています。

この近世の馬については、アイヌが柵で囲った牧場で馬を飼っていた可能性も指摘されているので、近世前半にはアイヌが馬産に従事する状況は広くみられたかもしれません。

北海道の在来馬をめぐる研究はまだ始まったばかりです。今後の発掘調査の成果に期待したいとおもいます。



馬を駆るアイヌ
(『松本吉兵衛絵入紀行』1859)

参考文献

- 東旭川町役場編1963『東旭川町史』
- 鈴木 信2002「擦文—アイヌ文化期の馬」
『北海道立埋蔵文化財センター年報』3
- 田村俊之2004「道央部のアイヌ文化」『新北海道の古代3』北海道新聞社
- 北海道開拓記念館2005『北海道の馬文化』
- 宮上 博2006「日本列島の馬とドサンコの起源」『Hippopfile』23

(図版は北海道開拓記念館2005より引用)